

池田草庵先生に学ぶ会・令和七年六月

「與姪盛」(池田草庵著作集P247～P249)

六月七日 (担当・西村、守本、哲彦、北見、高木)

與姪盛 (一)

吾頃讀_レ陸子書、陸子有_レ言曰、束書不_レ觀、游談無_レ根、旨哉言乎、夫束書不_レ觀、

讀み

吾れ頃、陸子の書を読む、陸子言有りて曰く、書を束ねて観ずは游談して根無し、旨きかな言や、夫れ書を束ねて観ずは、

言葉

陸子||陸九淵、陸象山、「心即理」説を唱える

頃||コロ この頃 夫||ソレ そもそも

訳

私はこの頃、陸氏の本を読んでいる。陸氏は言っている、「書物を束ねたまままで読まないのは、游談していても根拠がない」と、うまい言い方だ。書物を束ねたまままで、読まないのは、

則自_レ朝至_レ暮、耳之所_レ接、目之所_レ及、悉是俗事俗言、鄙俚繆妄、

讀み

則ち朝より暮れに至まで、耳の接する所、目の及ぶ所、悉く是れ俗事俗言、鄙俚繆妄

言葉

鄙俚||ヒリ 風俗やことば遣いなどが、いなかじみていて下品なこと。繆||ビユウ あやまる いつわる 妄||モウ ボウ うそでたらめなさま

訳

すなわち、朝から夕暮れまで、耳から入ること、目に入るもの、みんな俗事俗言で、下品ででたらめな考えばかりだ。

而游_二處其中_一困朦逼塞、恰如_二魚之醉_三泥水_一、特不_二以汨_三没其人_一、

読み

而して其中に游處し、困朦逼塞、恰かも魚の泥水に酔うが如く、特
以つて没するその人を沈ませず、

言葉

處_二おる 困朦_二はつきり見えぬ 逼塞_二ヒツソク 落ちぶれて、
世間にでられないこと 恰_二あたかも
汨_二ベキ 水中に没する 世にうずもれる

訳

そして、その中で気楽に生活していると、物事がはつきり見えぬ、
あたかも魚が泥水に酔っているように、没するその人を沈ませるわ
けではない

而又使_二顛倒錯亂_一、支離決裂不_二自覺_三、其如_二此之甚也_一、宜乎

其言之無根也、

読み

而して又顛倒錯亂、支離決裂を自覺させず、其れ此の如くの甚し
き也、宜乎なるかな、其言之れ根無なり。

言葉

顛倒_二テントウ さかさまになること 錯亂(乱)_二サクラン 入
り乱れて混乱すること
宜乎_二うベナル かな・むベナル かな なるほど 当然
甚_二はなはだしい

訳

そして、逆さまにし錯亂させ、考え方に筋道が立っていないことを
自覺させない。このようにひどいものだ。当然其の言葉は根本がな
い。

是故古之君子、必讀書焉、夫誦書者、譬如闇夜
之求燭、如聾聵之得警、

読み

是の故に古の君子は、必ず書を読む。夫れ書を読むは、譬れば、
闇夜の燭を求むるが如し、聾聵の警を得るが如し、

言葉

聾聵 || ロウカイ 耳が聞こえないこと

警 || 危急をつけて用心をさせる

訳

この故に、昔の君子は必ず書を読んだ。書を読むという事は、譬え
れば、闇夜に灯りを求めるようなものであり、耳の聞こえない人が、
警笛を必要としているようなものだ。